特集

未来へ繋ぐ想い

設楽原をまもる人たち

問合せ 秘書人事課（TEL 23-7623）

この記事は市民編集委員が取材・編集しました

天正3年（1575）5月21日（旧暦）、織田・徳川連合軍が武田軍を破った「長篠・設楽原の戦い」がありました。その戦いでは、織田・徳川連合軍が武田軍騎馬軍団の突入を防ぐために作った馬防柵がよく知られています。

この馬防柵は、「設楽原をまもる会」によって昭和56年に復元されました。全国に多くの古戦場がありますが、設楽原のように馬防柵など古戦場の景観がよく残っている場所は珍しいようです。

地域の歴史を調べ、そこに暮らしてきた人々の思いや願いを後世に伝えていくことは大切なことです。しかし、長く続けていくことはなかなか大変です。時が経ち、世代が代わる世の中では、地域に残された伝承も、いつしか忘れられてしまうことも多いものです。「長篠・設楽原の戦い」の歴史を、昭和・平成・令和と40年以上の間、伝える努力をされている「設楽原をまもる会」の方々にスポットをあて特集しました。

映画「影武者」がきっかけで会が発足

昭和55年、黒澤明監督の歴史映画「影武者※」がカンヌ映画祭でパルム・ドール（最高賞）を受賞し、当時多くの話題を呼びました。映画では馬防柵とそこを疾走する武田騎馬軍団が描かれ、その映画を観た人々が設楽原を訪れるようになりました。しかし当時、そこには馬防柵はありませんでした。

これが一つの契機となり、馬防柵を復元する試みがスタートしました。

▲内藤会長（左）と小林名誉会長（右）

※戦国時代の武将・武田信玄の影武者として生きることを強いられた小泥棒の物語。

しかし一部の人が再現するだけでは長続きしない、地域ぐるみの活動とし、地域の想いと理解があって初めて活動が開始できるという考えから「設楽原をまもる会」が発足しました。昭和55年7月9日のことです。

活動は仲間つくり

インタビューの中で強く印象に残ったのが、「史跡は努力してまもる」ということ、そして会の活動は「仲間つくり」ということです。

▲仲間と一緒に草刈り作業（令和６年５月）

馬防柵の材料となる木材は自然物のため、数年で腐食が進みます。管理維持していくためには、定期的に補修、交換が必要です。さらに景観美化のためには、年数回の草刈作業なども必要です。

▲道の整備作業（令和５年７月）

▲草刈り作業（令和５年８月）

これらの活動や関連する様々な活動に地域住民が加わることで、仲間つくりが進んでいきます。

設楽原をまもる会 年譜

昭和55年7月
設立総会を開催

昭和56年6月
設楽原古戦場いろはかるた49句完成

昭和56年6～7月
馬防柵の第1期復元作業

昭和58年1月
馬防柵の第2期復元作業

昭和61年4月
火縄銃演武の初開催

平成2年7月
第1回設楽原決戦場まつり開催

平成2年10～12月
20カ所に古戦場案内看板の設置

平成4年7月
設楽原決戦場まつりで子供武者行列を実施

平成6年7月
第5回設楽原決戦場まつりで火縄銃演武を実施

平成11年3月
「設楽原戦場考」出版

山から木を切出し馬防柵は作られた

当時、材料となる木材は、活動に理解や協力をしていただいている方々の山から1本1本切り出し、皮をむき、乾燥させたうえで馬防柵を組み上げていきました。こうして、昭和56年に第1期目の馬防柵が完成し、2年後には第2期目の馬防柵が完成しました。手探りの中で様々な資料を参考にし、復元を成し遂げました。

▲馬防柵の改修作業（令和５年 12 月）

かつては5年に1度、朽ちた木材を代えるために全ての馬防柵を修復していました。現在では防腐剤を注入した木材を利用し、作業量を減らして1年に1回、予め決めた区間を修復しています。この方法により定期的に馬防柵の改築ができ、作業手順を忘れることはないそうです。こうして、今でも技術の継承など試行錯誤をしながら、定期的に馬防柵の修復作業を行っています。

▲清水事務局（左）と中嶌副会長（右）

力のいる作業で大変ですが、活動の日には多くの方々が集まり、作業は次々に進んでいきます。参加者一人一人が主体的に作業するため、指示を出さなくても自ずと作業が進んでいくそうです。チームワークの良さを感じられる時です。

大変な作業ですが、世間話をしながら皆と一緒に修復した馬防柵を見ると、気持ちがよく、疲れも忘れるとのことです。

活動の輪が広がる

全国で少子高齢化が進んでいますが、「設楽原をまもる会」にもその波が襲いかかっています。メンバーの多くは70歳以上で、力のいる作業をやり続けるのに不安を感じるようになったそうです。その様な中、期待を寄せるのが地域外のサポートです。

▲今泉前会長

以前、草刈り作業に参加した人がその体験をSNSで発信したところ、関心を持った人が現れ、参加を希望する声が寄せられたそうです。現在では活動の前にはSNSで作業告知をし、県内外から歴史好きな方などが参加しています。参加した方々は、次回もぜひ参加したいと意気込むほど、貴重な体験となっています。

平成12年7月
山梨県の小学生が鉄砲銃玉1つを竹広で発見

平成14年12月
5回目となる馬防柵の全面改修（木材４００本を7日間で改修）

平成15年8月
東郷西小児童3人が鉄砲銃玉3つを馬防柵付近で発見

平成19年7月
設楽原鉄砲隊と共同で火縄銃連続撃ちを開催

平成20年1月
5年に1度の改修から毎年実施する方式に変更

平成22年7月
「火縄銃連続撃検証」を日本銃砲史学会で発表

平成23年12月
「設楽原の鉄炮と玉」を日本銃砲史学会で発表

平成26年8月
「戦国ウォーク」出版

令和2年夏
「設楽原をまもる会40年の歩み」出版

地域外から訪れた方がこうやって参加し、その方がSNSなどでさらに発信していくことで、活動の輪がさらに広がっていきます。

少子高齢化や人口減少が進んでいる中で、一つの可能性が出てきました。活動を続けていくためにも、この交流の輪が広がり続けることを期待されていました。

▲インタビューの様子

設楽原決戦場まつり

しんしろ戦国絵巻三部作の一角を担う設楽原決戦場まつり。「設楽原をまもる会」結成から10年の歳月を要し、平成2年に第1回が開催されました。

決戦場まつりは、直接関わる関係者の他に当然ながら、「観たい人」「行ってみようかなと感じている人」「協力する人」など様々な方々がいて成立します。全ての人が納得できるよう、当時、議論をしながら準備を進めていきました。今となってはまつりの風物詩となった、火縄銃演武もここからスタートしたのです。

その想いは多くの方に伝わり、地域や地元小中学校に協力をお願いしたことにより、回を重ね、ここまで続けられました。「設楽原決戦場まつり」が盛大になるにつれて駐車場問題も出てきましたが、近くの新東工業さんが駐車場の協力をしてくれ、その問題も解決できました。

▲多くの観客で賑わう設楽原決戦場まつり

▲大迫力の火縄銃演武

コロナ禍を乗り越え

世界的に猛威を振るった新型コロナウイルスは、「設楽原をまもる会」にも大きな影響を与えました。

毎年開催していた「設楽原決戦場まつり」の開催も一時期はできませんでした。また、活動自体も自粛をせざるを得ませんでした。

コロナ禍から解放され、活動を再開するにもいろいろと状況は変わってしまいました。

しかし、時代に逆らうのではなく、時代に合わせた形で進めていく大切さに気付かされたとのことです。今までの歩みを振り返り、何が大切なのか再認識する機会になったそうです。背伸びしても長続きしない、会の発足当時の「皆でまもり続ける」ことを再認識しました。さらに、現在の会員の多くは70歳を超えていますが、無理に働き盛りの現役世代にお願いすることはしないとのことで、「できる人が、できる時に、できる事をすればよい」という思いで活動しています。その位に思っている方がお互いに気が楽で、これが結果的に長続きできる秘訣のようです。現役世代は、仕事に子育てに色々忙しい。少し手が空いたり、退職した後に一緒にやってくれれば有難いとのことです。

想いは受け継がれる

「設楽原をまもる会」の活動や想いは、地域の人々に深く広がっています。東郷地区の小中学校における「総合的な学習の時間」を利用した歴史学習、運動会での表現運動や学習発表会での歴史劇など、学校教育の活動にも深く取り入れられています。東郷地区で育ち、成人した人たちにとって、「長篠・設楽原の戦い」に関連した活動の思い出は、一生忘れられないものとなっているようです。

設楽原を中心とする各地には、「設楽原古戦場いろはかるた」の看板が立てられています。その看板からその地を訪れた人が、戦いのポイントとなる史実や戦いに参戦した人物を感じ取ってもらえるのです。また版画を基に作られた「設楽原古戦場いろはかるた」を使って、小中学校では、かるた大会を開いていることもあります。こうやって「長篠・設楽原の戦い」が生活の中に溶け込んでいるのです。

▲馬防柵にある「設楽原古戦場いろはかるた」

歴史を刻み、未来へ繋ぐ

今年は「長篠・設楽原の戦い」から450年の節目です。450年は途方もなく長い年月です。450年前の戦いを私たちがイメージできるのは「設楽原をまもる会」が行っている地道な活動があったからです。映画「影武者」が一つのきっかけだったかもしれませんが、復元するパワーは並々ならぬものです。

「設楽原をまもる会」は時代に合わせ、柔軟に活動をされています。一歩一歩着実に前に進み、歴史を刻み続けています。この地を訪れる大勢の方に来て良かったと感じてもらえるように、これからも「設楽原をまもる会」の方々は活動を進めて行かれるのでしょう。

編集後記

皆さんのお話で「できる人が、できる時に、できる事をやれば良い。仲間つくりが大切」が心に残りました。歴史を守り繋げていく。とても大変なことで、ご苦労されたことでしょう。

私も馬防柵の作業に参加させていただきました。力仕事で大変な作業ですが、時間が過ぎることも忘れるくらいに楽しい時間でした。終わった時には疲れた顔ではなく、笑顔で終われたのも、皆さんの「力」だと感じました。「縁の下の力持ち」そんな存在の皆さんでした。

私たちも「できる時に」新城の大切な歴史を守っていく、その様な活動の輪が広がっていくとよいと感じました。